

## 「内陸のくじら」(あらすじ)

裕福な家に育った美しい娘、ネネム。両親から、結婚のときは最高の代価を受けとることを期待されていた。しかし、ネネムが選んだのは、やもめで貧しい母親の一人息子。二人の間には子どもができたが、ネネムの両親と家族は、驚き、怒り狂った。若者に持参できる財貨などなく、ネネムの一家にとって侮辱以外のなにものでもなかったからだ。絶望した若者は村を去り、行方がわからなくなってしまった。それでも両親の怒りは収まらず、ネネムを家から追い出し、もう自分たちの娘ではないと宣言した。

恋人の母親のフネという老女が、川ぶちのみすぼらしい棲み家へとネネムを引きとった。その家で、ネネムは男の子、トアンを産んだ。三人はつつましく暮らしたが、やがてフネが亡くなる。

あるとき、村の人が、川上で開かれる世界再生の祝いに、ネネムを誘いに来た。気おくれしながらも、身支度をして、最後のダンスに間に合うように、ネネムはトアンを抱いて出かけた。儀式の場所では、友人たちはネネムを歓迎し、ダンスの合間には礼儀たたく好意を示したが、血のつながりのある親戚はネネムを無視した。ネネムはそこにいることが堪えられなくなり、小さなトアンを腕にだいて、そっと抜け出す。

ネネムは川ぞいの踏み分け道に戻り、山のなかを通りぬける道を選んだ。二人は、フィッシュ・レイクと呼ばれる山のなかの小さな湖のそばで野宿することにした。

ネネムの祖父母の時代になるまえ、大地がひどく傾き、大海の水が川を遡り、魚やその他の海の生き物もいっしょに、山奥まで押しよせてきたことがあった。祈祷とダンスによって、大海の水は河口の砂州の外へともどったが、一頭の若い雌くじら、ニナワだけが、フィッシュ・レイクにとり残されていた。

ニナワはネネムが泣くのを聞いていた。なぜ泣いているのかもわかっていた。ニナワは、ただのくじらではなかった。大きな力を持ち、悩み苦しむ者に同情をよせることができた。とりわけネネムの苦しみをニナワは憐れんだ。ニナワがトアンと同じように、父無し子だからだった。ニナワは、湖を横切って倒れ落ちた丸太のようにじっとして、一瞬だけでもよいから、トアンがここまで来て自分に触れてくれることを願った。そうすれば、自分の力のいくぶんかが、トアンに流

れこむから。

翌朝、トアンは水につかって、少しずつニナワに近づいていった。ネネムが目をさまし、トアンをさがしてあたりを見まわすと、水浸しの巨大な丸太に見えるものの上に、トアンがいた。ネネムは驚いたが大声を出さずにトアンのあとにつづき、二人は無事に湖を渡った。村に戻って、二人はふたたび暮らしはじめた。トアンの曾祖父が、トアンに、宝物を入れる箱の作り方や、狩りの仕方を教えた。

やがて曾祖父は死んだ。葬いの儀式があり、喪があけ、トアンはひとりでフィッシュ・レイクへ行った。曾祖父の死で、底が抜けてしまったように悲しかった。湖のほとりで横になり、眠って、夢を見た。

夢にニナワがあらわれ、トアンにたくさんのことを言った。おまえは、よい男になり、すばらしい狩人になるだろう。多くの宝と富を手にするだろう。そして、ペクウォイの最も偉大な息子として、みなに知られるようになるだろう。幼い日にニナワに触れたことと、ひい爺様が教えたことのどれひとつも忘れないように、と言った。

トアンは疲れを知らぬ狩人となった。買い手や交易者が繰り返しかえしやってくるのは、トアンや、トアンの品物が、気にいっているからだ。トアンの取引は、川上の奥地から川下の海岸までひろがった。貴重なツノ貝の貨幣がだんだんあつまり、ひとつの大きな箱がいっぱいになった。

やがて、ネネムの弟たちが、トアンたちのところにやってきて、ネネムの立派な生家にきて住むよう招待した。トアンはその家に移ったが、ネネムは、フネが自分とわが子を守ってくれた、ぼろぼろの家に住みつづけた。年老いて、ようやくネネムはトアンの求めに応じて、自分の生家の立派な家に戻った。死ぬときは、かつての恋人の母、フネがいつも身につけていたカエデの生皮のスカートと前掛だけを着せ、彼女の傍らに埋葬するようにと言い残した。その墓は、川ぶちの、ただ窪んだ草地に、いまもある。